



落穂を拾う祖母のトミさん(98)。畑では年間数十種類の野菜を育て、稲刈りには必ず参加する、現役の農家だ。

私が継ぐ
高校3年生のとき、五つ上の長女の結婚話が持ち上がった。しかし相手は二人兄妹の長男で、結婚

伝いは単調でつまらなく、3時の「こびりっこ」だけが楽しみだった。「こびり」とは「小屋」と書くおやつのこと、時間になると手を止め、家族みんなでおほぎを頬張った。小学校3年生のとき、寿美子さんが「こびりっこ」について書いた作文が学校で表彰された。そのとき初めてそれが標準語ではないことを知り、「うちしか言わないんだ……。なんてことを書いたんだ」と恥ずかしくなった。坂本家が居を構える「黒沢集落」は、同級生からも「あそこだけには住みたくない」と言われるような山奥にあった。田舎者の劣等感は募るばかりだったが、お米のおいしい記憶は鮮明だった。羽釜で炊いたごはんの香りが家中を漂い、蓋を開けるとカニ穴が見えた。

約束の2年が経ち、寿美子さんは家に帰ってきた。地元の花屋で働きながら、田植えや稲刈りの農繁期は家の手伝いをしてきた。ある日、同じ集落の会社が事務員を探している、と父が聞きつけ「ここに就職しろ」と言ってきた。花屋の仕事が好きだったが、父の言う通り面接を受けた。隠れて面接を受けることが心苦しくて上司に打ち明けると、「そんな気持ちで働かれ



1.坂本寿美子さん。2.愛猫家の寿美子さん。飼い猫3匹の他に家の周りに住み着いた野良猫「こく」の世話も焼く。
3.平成3年の黒沢集落の地図。当時は15軒の家があった。

抜けるように青い空の下、黄金の稲穂がコンバインに刈り取られていく。ハンドルを握るのは母・坂本登井子さん(74)だ。娘・寿美子さん(47)はコンバインの後ろをついて歩き、刈り残しを鎌で刈る。祖母・トミさん(98)はさらにその後を歩き、たつた1本の落穂も逃さず拾い集めていく。理由を聞くと、「こういうの拾わね家はみんな跡取りが絶つてる。金でねえんだよ、こういうの粗末にしちゃいけない」と力強く言った。

コメの記憶

坂本家は代々続くコメ農家で、寿美子さんは三姉妹の末っ子として生まれた。コンバインなどない時代、稲刈りは今以上に重労働で、子どもまで全員が駆り出された。幼稚園上がる頃には稲穂を載せたリヤカーを押して手伝いをした。もっと小さい頃は、一人家には置いておけないのでリヤカーに入れられて稲刈りの様子を見ていた。手